

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：35307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520253

研究課題名(和文) 『大峯縁起』の成立と享受についての研究 修験から修験道、そして教団へ

研究課題名(英文) A Study on the Invention and Reception of "Omine Engi"

研究代表者

川崎 剛志 (KAWASAKI, Tsuyoshi)

就実大学・人文科学部・教授

研究者番号：70281524

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：至高の霊山、大峯の由来を語る『大峯縁起』は、修験道の祖、役行者から脈々と受け継がれた書物として、平安時代後期、突然、大和国に現れた。室町時代前期、聖護院門跡が熊野三山検校職を兼帯するようになって以降、その正統性を証明する秘書として『大峯縁起』は重用され、修験道教団の形成に大きく寄与したが、鎌倉時代後期にはそうした状況は確認できず、天台宗寺門派ではなく、むしろ東大寺東南院など真言宗寺院において『箕面寺縁起』とともに重用されたことを解明した。

研究成果の概要(英文)："Omine Engi" tells us the origin and history of "Omine", the most sacred mountain in Japan. It appeared in Yamato Province in early Heian era and claimed that it had been handed from "En-no-Gyoja", the founder of Shugen-do. Since "Shogoin Monzeki" hold "Kumano Sanzan Kengyo", the top of Shugen-do, it has been taken into confidence as a evidence of the legotomacy of them and has contributed to their religious organaization. However, we don't see the same state in later Kamakura era. I have found out that both "Omine Engi" and "Mino'odera Engi" were taken into confidence, not at Tendadai-shu Jimon-ha temples, but at Shingon-shu temples, for example "Todaiji Tonan'in".

研究分野：日本古典文学

キーワード：大峯 縁起 修験道 役行者 聖護院 東大寺東南院

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 修験道は自然崇拜に根差した日本固有の信仰として、国内はもとより国外でも関心が高い。そしてその関心の対象は、これまで、山の霊力が都市や社会にもたらす力、修行や参詣の儀礼のもつ宗教的意味といったところが大半を占めてきたが、現在は、儀礼を意味づける言葉と書物の世界にも広がりつつある。

修験道の言葉と書物の世界という、従来もっぱら『諸山縁起』(宮内庁書陵部蔵、鎌倉期写本)が注目されてきた。それに対して、良質な写本が現存しないためか、『大峯縁起』の知名度はさほど高くないが、中近世の修験組織における評価の高さ、影響の大きさからみても、あるいは役行者の天竺前生譚を含む記事内容の豊かさからみても、『諸山縁起』に比肩する重要な書物であることは疑いない。

(2) 研究代表者(日本古典文学専攻)は、これまで、宮家準の先駆的研究(1989)を批判的に継承するかたちで、『大峯縁起』の校訂本文を公刊し、その出現と享受についていくつかの事実を指摘し、推論を述べてきた。

また、在米の研究協力者(日本仏教学専攻)は、金峯山を中心に、都市寺院と山岳寺院との有機的な関係の解明に取り組んでおり、特に新出「江記逸文」を材とした寛治六年の白河院金峯山御幸の分析は画期的業績と認められる。現在、研究代表者を含む日本人研究者と共同して、新出「江記逸文」の基礎研究を進めている。

## 2. 研究の目的

『大峯縁起』は、山伏の祖、役行者から相伝されたという至高の縁起であり、本山派の修験教団が形成された室町時代以降、『大峯縁起』を相伝することが、熊野三山検校を兼帯する聖護院門跡の正統の証しとされた。しかし、それは創られた始原と歴史であり、平安時代末期、興福寺僧と所領を争う、葛木山東麓の「役行者誕生地」を本拠とする山伏に相伝された縁起として現れたのが、文献資料上の初見であった。

本研究の目的は、『大峯縁起』の出現から転成に至るまでの経緯を検証し、その書物と本文の果たした宗教的・社会的な意味と機能を時間軸にそって解明し、修験「道」、そして「教団」の形成に、『大峯縁起』という書物の存在がいかに寄与したかを評価することである。

## 3. 研究の方法

(1) 上記の研究の目的を達成するために、『大峯縁起』逸文・関連話の集成  
『大峯縁起』享受史の検証  
修験「道」、「教団」形成に至る過程の解明  
という三つの大きな課題を設けて、日本文学、

日本美術史、日本宗教(在米)の各分野の研究者3名がそれぞれの視点から課題と当該の事象を分析、評価する。その上で議論を交わし、順次、その成果を公表する。また、この研究組織の構成によって、本研究事業は学際性と国際性を確保している。

(2) 上記三課題のうち、課題 については、逸文・関連話の範囲を広げて、引用・影響関係が明白な事例ばかりでなく、『大峯縁起』の記事内容を相対化するのに有効な事例を幅広く採取する。主な対象は、白河院金峯山御幸を記した新出「江記逸文」であり、また平安・鎌倉時代に制作された、山岳信仰の要素を含む寺社縁起の本文や画像も視野に入れる。課題 については、長谷川賢二・徳永誓子らの歴史学の成果を踏まえて、そのなかで『大峯縁起』を中心に縁起の果たした役割を解明する。

## 4. 研究成果

(1) 平安・鎌倉時代に撰述された役行者の事績を含む縁起を分析、評価することによって、『大峯縁起』の出現を相対化した。

すなわち、『箕面寺縁起』(平安末期撰)では夢中で役行者が真言密教の灌頂を受けたと記されており、『七天狗絵』(鎌倉後期撰)や『真言伝』(鎌倉後期撰)にもその説や本文が継承されている。あるいは醍醐寺との相論のなかで東大寺東南院もこれに与している(雑誌論文、学会発表)。また『当麻寺流記』(鎌倉前期撰)では役行者が四天王像を飛来させたと記されている(雑誌論文)。このように、役行者を仏教史の正統に位置づける姿勢は、『大峯縁起』や真福寺本熊野金峯縁起群に限られたものではなく、平安後期以来、広く定着していたことを解明した。

上記のうち『箕面寺縁起』の分析、評価は、主に海外の研究者に向けて、欧米の学会や英文の論文で発表してきたが、今後は、日本漢文学専攻の仁木夏実(明石工業高等専門学校)と共同で厳密な本文校訂、訓読、注釈を行い、その上で国内でも成果を発表する予定である。

(2) 『大峯縁起』の享受史のなかで最も著名な真福寺本『熊野権現金剛蔵王宝殿造功日記』(鎌倉後期写)には、白河院の熊野・金峰山御幸に関して史実に基づく記事と大胆な虚構の記事とが混在している。このことと関連して、金峰山御幸の内情を記した新出「江記逸文」の共同研究を行い、史実を確認すると同時に、同逸文の記事が後代に及ぼした影響を推察した。なお本件については説話文学会でシンポジウムを開催し、広く問題を提起するとともに、多くの御批正を賜った(雑誌論文、学会発表)。

(3) 修験「道」、「教団」の形成については、

長谷川賢二ほか編『修験道史入門』(2015)の重厚な成果を反映して議論、分析すべきだが、本研究事業の最終年度の秋に公刊されたため、その点は今後の課題となる。

さて、鎌倉後期の天台宗寺門派による熊野三山検校の奪回と熊野御幸の再興は、修験「道」の成立と深く関わる現象として従来から注目されてきた。本研究事業の当初は、『大峯縁起』がこれに用いられた可能性も視野に入れていたが、御幸再興に関する日記や和歌を分析した結果、同時期にはもっぱら真言宗寺院で重用されていたことが判明した(学会発表)。今後、雑誌論文を発表する予定である。また、『両峯問答秘抄』の基礎研究のなかで、室町時代の熊野三山検校 同奉行体制下における『大峯縁起』重用の実態を例示した(雑誌論文)。

(4) 修験「道」の成立を論ずる上で、後に修験道の聖地とされる場の、修験以前の信仰に対する分析、評価が不可欠であることが、本研究事業の進展とともに次第に明らかになってきた。

そのことを具体的に考えるため、西暦 900 年前後に制作された熊野速玉大社の神像群を取り上げて、その位置づけを試みるシンポジウムを開催した。美術史、歴史学、文学など異なる研究分野の視点から、学際的にこの神像群を評価し、それを材に、平安中期の熊野信仰の多面性と先進性について議論を交わした(雑誌論文、学会発表)。

すぐさま解決できる問題ではないが、ひとつには、院政期の熊野御幸の盛行よりも前から、熊野速玉社が朝廷から第一級の手厚い信仰を受けていた事実を再確認した。いまひとつには、これら神像の像容は在地の信仰の反映とはいいがたいが、ひとたびこれが安置されると、熊野の信仰、あるいは修験道の形成に大きな影響を与えたと推定され、今後、熊野信仰史、修験道形成史を考えると、そうした回路が働いた可能性を常に念頭においておく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

Kawasaki Tsuyoshi, The Invention and Reception of the *Mino'odera engi*, Japanese Journal of Religious Studies, 査読有、Vol.42、No.1、2015、pp.133-155

Heather Blair & Kawasaki Tsuyoshi, Editors' Introduction *Engi:Forging Accounts of Sacred Origins*, Japanese Journal of Religious Studies, 査読有、Vol.42、No.1、2015、pp.1-26

川崎剛志、シンポジウム「九・十世紀の

熊野と王権 熊野の神像へのまなざしから」の概要報告、和歌山県立博物館研究紀要、査読無、21号、2015、pp.1-4

大河内智之、熊野の神像とその図像継承 地域史叙述の観点から、和歌山県立博物館研究紀要、査読無、21号、2015、pp.13-32

川崎剛志、金峯山の埋経と役行者の行道、説話文学研究、査読有、49号、2014、pp.69-72

ヘザー・ブレーア、新出「江記逸文」紹介：白河院の寛治六年金峯詣をめぐる、説話文学研究、査読有、49号、2014、pp.32-41

ヘザー・ブレーア、「江記逸文」翻刻、説話文学研究、査読有、49号、2014、pp.41-46

川崎剛志、「当麻寺流記」の発見、中世文学、査読有、59号、2014、pp.54-62

川崎剛志、『両峯問答秘抄』の撰述に関する推論、熊野学研究、査読有、2号、2013、pp.12-24

[学会発表](計6件)

佐伯真一、源健一郎、川崎剛志、鈴木正崇、シンポジウム「延慶本『平家物語』と紀州地域・修験」、紀州地域学共同研究会研究集会 2015 夏、2015.8.29、和歌山大学(和歌山県・和歌山市)

川崎剛志(コーディネーター)、伊東史朗、大河内智之、上島享、シンポジウム「9・10世紀の熊野と王権 - 熊野の神像へのまなざしから -」、和歌山県立博物館特別展「熊野 - 聖地への旅 -」、2014.11.9、和歌山市立美術館(和歌山県・和歌山市)

Carina Roth, Kawasaki Tsuyoshi, Heather Blair、Panel "Creation of Sacred Sites", ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)第14回国際会議、2014.8.30、リュブリャナ大学(スロベニア)

川崎剛志、『当麻寺流記』の発見、中世文学学会秋季大会、2013.10.20、ノートルダム清心女子大学(岡山県・岡山市)

川崎剛志、霊山の時空の再構築 『箕面寺縁起』の出現とその余波、国際研究集会「東アジアの宗教とパフォーマンス、都市と地域」、2013.10.10、イリノイ大学(米国)

川崎剛志(コーディネーター)、近本謙介、Heather Blair、馬耀、上島享、シンポジ

ウム「白河院金峯山御幸の記録と記憶  
新出「江記逸文」をめぐって」、説話文  
学会例会、2013.4.20、慶應義塾大学（東  
京都・港区）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川崎 剛志（KAWASAKI, Tsuyoshi）

就実大学・人文科学部・教授

研究者番号：70281524

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

Heather, BLAIR

インディアナ大学・宗教学部・准教授

大河内 智之（OKOCHI, Tomoyuki）

和歌山県立博物館・学芸員